

2015/8/3

M150850 齊藤 弘樹

M151034 竹内 和也

M151278 村田 翔

M153563 辻 幸大

M151519 迫 有香

【発表題目】

『社会科授業力改善ハンドブック』ビデオクリップ選定・製作Ⅱ

【発表構成】

- I. はじめに
- II. ビデオクリップ選定・製作意図と克服の手だて
- III. 考察
- IV. おわりに

I. はじめに

本発表の目的は、『社会科授業力改善ハンドブック』の第4章～第6章にある、教師のつまずき場面の克服に向けて、どのような映像の構成が適切であるのか明らかにすることである。

【RQ】

どのような社会科教師教育の映像資料の構成・提示が効果的であるか。

II. ビデオクリップ選定・製作意図と克服の手だて

IV-① 学習すれど受身（生徒の能動的な学習にしたい！）

〔1〕問題場面・製作意図

本場面は、授業展開が教師の一方的な解説にとどまり、生徒の学習が受動的になってしまうことが問題の中心である。具体的には、「西アジアの地域的特色は何だろう」という学習課題のもとで、気候や宗教（と生活）などを教師の一方的な解説によって、説明しているため、生徒はノートにまとめているものの、つまらなそうにしており、苦痛を感じている様子を改善したいという場面である。

本場面に即した問題状況把握のための映像として「模擬授業型」映像を提示する。本場面は生徒の受動的な学習活動が大きな問題点であるため、生徒の目線からも授業の課題や改善点に気づく必要がある。よって、教師にもなじみのある模擬授業という想定の中で、授業を提示し、生徒目線での授業展開の課題を考えるとともに、教員研修等の場面で、どのように問題を解決すればよいか改善策を提示する材料

になるように構成した。

〔2〕克服への手立て

- ・パフォーマンス課題を取り入れる

生徒の能動的な学びにするために、パフォーマンス課題を取り入れることが手立てとして考えられる。学習材の例であれば、10年後の西アジア情勢を予想する記者として取材活動やレポート活動を学習活動に組み入れている。その他にも、新聞記者として新聞記事を作ることや、調べた内容をプレゼンテーションにして提案するなどの学習活動を展開に組み入れることが望ましい。

- ・思考・判断場面を取り入れる

歴史的事象の説明や空間的に乖離した地域の地理的事象の説明が中心の学習は知識の暗記学習になりがちで、生徒が受動的になりやすい。よって、説明するのではなくて、同じ状況下では生徒自身がどのように考えるかという思考・判断場面を導入するとより能動的な学習になると考える。具体的には、「本能寺の変で織田信長が殺されたという情報が入りました。あなたが豊臣秀吉だったらどうしますか？」というように、歴史上の人物の判断場面に生徒を立たせることで、時代背景などを考えて、能動的に考えることができる。

IV-② 学習に参加していない（生徒を学習に参加させたい!）（竹内先生）

〔1〕問題場面・製作意図

問題場面は、竹内先生のアクションリサーチ実習（AR 実習）の1時間目の授業である。授業の概要は以下の通りである。竹内先生は、原発再稼働に対する有権者5名の意見から、エネルギー政策に関する4つの視点を生徒に獲得させることを意図していた。しかし、5名の意見の読解は、個人での活動になっており、生徒が資料についてしっかり思考したのかについては分からない。また、エネルギー政策の4つの視点については生徒から、うまく引き出すことが出来ず、最終的に教師が説明する授業になってしまっている。

本映像はカットする場面が多く、そのことも相まって実験的に字幕を多用している。そうすることで、映像に向かう教師たちに授業場面を正しく、そして意識的にとらえさせ、彼らが克服の手立てを考えるきっかけとなるように映像を構成した。

〔2〕克服への手立て

- ・資料の読解の場면을グループワークにし、班員と意見の交換・共有をできるようにする。
- ・教師が生徒から発言を引き出し、発言を掘り下げたり、視点を変えたりしながら、その内容を深められるようにする。

V-① 答えが収束しない（授業をうまくまとめた!）

〔1〕問題場面・製作意図

この場面は「答えが収束しない」という題目に即した動画である。我々はこのタイトルを「授業を上手くまとめた!」という形で捉えなおした。そして、動画のコンセプトとして「達人」の授業を学び取ろうという意図を踏まえた動画を作成した。具体的にはある教諭が授業のまとめに対して困りを感じて

おり、その困りを解消しようとしていた時に良い授業を見る機会があり、授業観察を行う流れとなっている。この授業では児童が見つけた安売りの工夫をたくさん出し合っていく中で安売りをする店員側の考えを導こうとしていく。そこから、店員側の気持ちになるという新たな概念形成を図る手立てを講じている。そして、まとめとしてお客・店員の気持ちを踏まえたくて教師がまとめを行っている。このまとめに近づいていく場面を使用した。

前回授業の後半にて議論された動画作成においての検討事項に関して、いくつか提案していきたい。まず、本動画では、実際の授業映像を使用したものを作成した。この意図は、達人に学ぶ、すなわちよい授業からどのように学び取って自分の実践に取り入れていくかどうかを検討できるように提案した。次に研修の意図としては目標が明確に設定された映像とした。研修を受ける全員が目標を認識し、解決策もしくはより良い方向性へ導くためには、ある程度明確化されたものにすべきであると考えた。

〔2〕克服への手立て

- ・意見がうまく出なかった場合、発問の仕方を変えてより具体性を持たせた問いを考えてみる
- ・意見が本来の目標とは異なった形でまとまった、もしくは意図とは異なった意見が出てきた場合、途中の手立てが合っていないことが考えられる。また、教授すべき情報がうまく浸透していない場合が考えられる。そのために、新たな手立ての構築とともにまとめを行う前に少し振り返る時間を与えるなど、生徒の考えを整理する時間を設ける必要がある。
- ・生徒の意見を集約する際に、意見を出させるだけではなく意見をいくつかに分類するようにし、最後のまとめを行うときに意見を活用できるようにする。

V—② 答えが発展しない

(答えを発展させたい！習得した概念的知識を活用して、他の事象や他の事象との関連を説明させたい)

〔1〕問題場面・製作意図

本場面は、個別的知識の網羅的な教授ではなく、概念的知識を学習者に獲得させたいと考える教師がなかなかうまく学習者に概念的知識を獲得させることができないでいる場面である。事象間の関連を説明させる際に、最初に提示した事例で一体どのような概念的知識を獲得させることができたのかが充分でない状態で、他の事象を反証過程（検証過程）として提示してしまい、十分な吟味・検討が行われなかったり、議論が打ち切られたりしてしまう状態に陥っている。

悩める教師は、概念探求学習に熟達した教師の授業を見ることで、授業中に提示した一つ目の事象で丁寧に概念的知識を獲得させ、知識の成長の促す土台を固めている点や、概念的知識を学習者が獲得できているかどうかを、学習者に説明させている点に気づくことができるように映像製作を行った。

〔2〕克服への手立て

- ・学習者に獲得させたい概念的知識を、一つ目の事例でしっかりと定着させることがまず重要であり、概念的知識を活用させ、類似の事象を累積的に説明させたり、既存の概念的知識では説明できない事態を設定したりして、揺さぶり、変革・成長させていく。

VI-① 授業と評価が乖離（指導と評価を一体化させたい！）

〔1〕問題場面・製作意図

授業者は、授業を充実させるために、様々な工夫を凝らす。育てたい子ども像や理想とする社会科像も明確にある。それを授業中に具現化しているような感覚を味わっているかもしれない。

しかしながら、授業者が単元終了後や定期テスト等で作問したテストや、あるいは同一学年を共同で担当している他の社会科教師が作問したテストを学習者に実施してみると、正答率が低かったり、あるいは「先生、テストのこの問題授業でやりましたか？」などといった直接的な質問を学習者側から受けたりしてしまう。一生懸命指導した内容と評価問題とが乖離している状態である。

本場面は、具体事例として、生徒たちに活発な議論をさせることはできたが、その学習を通してどのような個別的知識を育成することを企図していたかが構造的ではなく、結果、授業の事実と評価問題とにズレが生じてしまったという状況が分かるように映像制作を行った。

〔2〕克服への手立て

- ・評価規準や評価規準を明らかにし、評価問題や評価の視点となるルーブリックをあらかじめ作成した上で授業を実践する。
- ・当然すぎることであるが、共同で同一学年の社会科を担当している教師と評価と指導に関わる綿密な打ち合わせを行った上で授業を実践する。

VI-② 目標と到達度が乖離（目標に到達させたい！）

〔1〕問題場面・製作意図

本場面は、教師の設定した目標に対して、テストの結果から到達度の個人差が予想以上にあったことから、教師はどこで生徒はつまづいたのかを振り返っていく場面である。研究授業では現れ難い場面であるため、ビデオクリップを作成するに至った。そのつまづき場면을再現したビデオクリップの内容は以下のようなものである。

藤原道長の摂関政治の授業で、1時間目⇒2時間目⇒3時間目と進んでいく。3時間目では班活動で「藤原氏はこの時代になると摂関として大きな力を発揮できたのか？」について話し合い、ホワイトボードに書かせて発表をさせる。ある生徒はつまづきの状態であったが、理解している生徒の書いたホワイトボードを見て、発表した。教師はその発表を見て、生徒は理解しており、目標は達成できたものだと思っている。しかし、テストでは同じ問題であるのに、答えた生徒は全然書けていなかった。

〔2〕克服への手立て

目標と到達度が乖離している場合には、生徒がつまづいている場面と原因を把握した上で改善をはかる。この場面は2時間目までは理解していたため、3時間目のどの部分でつまづいたのか、考えていく。つまづいている生徒は摂政・関白の用語の意味が理解できていない状態であったのに加え、しっかり考えずに他の生徒が準備した答えを読んでいた可能性がある。

教師は授業観察、ノートや発言、作品などの学習の記録・ポートフォリオを手がかりにする。つまづき場면을把握したら、個別の生徒への学習支援策や授業改善案を練ることが大事である。

Ⅲ. 考察

今回の問題場面の映像作成を通して、教師の段階的な課題レベルによって、課題が異なり、その問題のとらえ方によって、映像の構成や、問題場面や解決策の提示の仕方が変わってくると考える。以下では、教師の持つ課題レベルと映像構成の関係性に着目し、どのような対応がみられるか明らかにした後、RQに応えたい。(別添資料図1参照のこと)

まず、教師の課題レベルについてである。課題レベルは大きく分けて、①基礎的課題、②共感的課題、③理想的課題の3つに区分される。①基礎的課題とは、その教員にとって当然のこととなり、これまでに課題として経験し、現在では解決策を具体的に考えられる段階にある課題である。学習材の例であれば、教材研究を行うことや、考えを指導案の形にすることである。次に②共感的課題とは、授業実践がある程度できるようになった教師が現在直面している課題であり、解決に向けて取り組んでいる課題である。例えば、生徒の受動的な学習を改善したいという悩みや、生徒を学習に参加させたいという課題などである。③理想的課題とは、②共感的課題を経験し、より生徒の思考に沿って内容を深めるまたは、生徒の社会認識をより高次なものに引き上げようとする、つまりは「授業名人」になるために取り組む課題である。具体的には、生徒の意見を引き出し、統合して概念形成を行うことや、習得した概念を活用して生徒に説明させることなどである。

以上にみてきたように、本学習材には3つの課題レベルが存在すると考える。ただし、「基礎的」「共感的」「理想的」というラベリングは、「授業実践はできるが、名人まではいかない」若手教師を想定したものであり、問題場면을提示する対象によって変化しうる。例えば、「教育実習に行く前の、学部3年生」であれば、当然①基礎的課題が共感的課題になりうる。よって、ここでは、若手教師(初任研?)を対象とした場合に問題提示の仕方がどのように対応するか考えることとする。

まず、①基礎的課題に対してはリフレクション型が対応する。リフレクション型とは、問題状況を理解し、解決策の提示を考えると同時に、自己の実践においてできているかを確認する過程である。ある程度授業を構成できる教師であれば、自己の社会科の目標は明確であるか、目標や学習課題に向けて授業や問いは構成されているかのように、これらの課題はチェック項目として、自己の反省を振り返る材料になると考える。また、若手教師にとって解決策の提示は、自己の課題ではなく、より若手の教師に対するアドバイスとして提案されるようになる。

上述のように、ここでは若手教師を対象と考えているが、一方で教育実習生や未熟な教師の中で、問題に直面していても、どこに課題があるのか自覚していない実習生や教師にとっては、課題が何かを表面化する材料として役立つと考える。

②共感的課題に対しては課題解決型が対応する。課題解決型とは、問題状況を理解し、他者と話し合うなどして、解決策を導き出す過程である。初任者レベルの教師や教育実習を終えた学生は受動的な学びや、生徒を取り込むことに苦勞し、いくらか解決策を見つけようとしているのではないかと考える。よって、それらの経験や知識から、直近の課題を解決するように取り組む材料となると考える。

③理想的課題に対しては、解決策発見型が対応する。解決策発見型とは、問題状況を理解し、解決のためのヒントを組み込んだ映像からその「よさ」を見つけ、自己の授業展開に生かすといった過程である。「授業名人」と呼ばれるベテラン教師の実践から、「どのように生徒から出た意見をまとめ、より高次の認識に導いているのか」、「どのようにすれば生徒に概念を習得させ、活用させることができるのか」

という課題に対するカギとなる指導技術や授業展開を学び取ることができると思う。

以上の考察から、RQに応えたい。

【RA】

教師教育の映像資料の構成は、課題レベルに応じて、

- ①基礎的課題－リフレクション型
- ②共感的課題－課題解決型
- ③理想的課題－解決策発見型

と対応させる形で問題場面や解決策を提示することが効果的である。

IV. おわりに

本発表においては、社会科教師教育における効果的な映像資料はどのようなものかを具体的映像とともに提示し、教師の課題レベルと合わせて、適切な映像構成や問題場面の提示の仕方を考察した。

しかし、本発表における考察は、本学習材に対応したあくまで仮説的なものであり、問題状況に対してより適切な映像構成や問題提示の方法がないかより精査を重ねる必要がある。よって、以後の議論や開発においては、前回の後半に行われたような適切な映像の長さや実際の授業映像の使い方についてもより詰めて議論されることを期待したい。